

# 焼け跡に見た夢

## 菅原文太 虚と実の軌跡④



三山 喬

### 「物申す男」になったスター

この春、検察の独立性に懸念が集まった検察庁法改正問題で、数百万件もの抗議がSNSで示される「ツイッターデモ」という現象が自然発生した。法案の廃案にもつながる大反響を呼ぶかたわら、参加した小泉今日子やきやりーばみゆばみゆら何人かの著名人に対しては、「無知な芸能人のくせに」と誹謗中傷が殺到するネガティブな反応も見られた。全米各地に広がった黒人暴行死事件の抗議行動でも、差別反対を表明した大坂なおみや八村塁ら在米アスリートに、母国日本

の一部からそれを批判するツイートが寄せられた。人気商売の芸能人やスポーツ選手らは、(とくに体制に異を唱える) 政治的発言をすべきでない――。

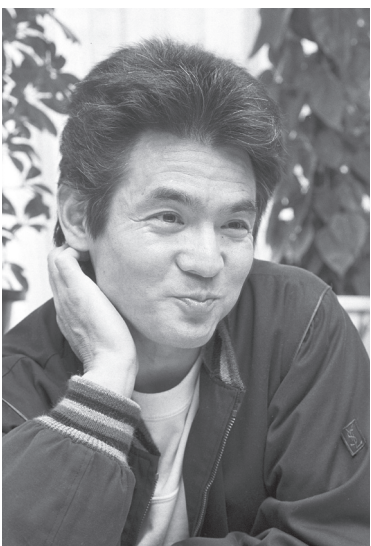
日本にはそんな暗黙のタブーがあることを、改めて思い起こさせた出来事だが、六年前、八十一歳で世を去った映画スター・菅原文太の場合、そんな風土に何ら気兼ねせず晩年の数年間、まるで社会運動家に転身したように、一次産業への回帰や反原発、改憲阻止等々の社会派メッセージを雑誌やラジオの対談で積極的に発信した。

三十九歳のとき実録ヤクザ映画『仁義なき戦い』で

大ブレイク、〆コワモテのトップスターに躍り出た人物の別人のような晩年。しかもその没年・二〇一四年は、この国で、公然と政治に物申すこと〆がかつてなく難しい空気に包まれた年だった。

政権との対決姿勢が強かった朝日新聞は、原発事故や慰安婦報道の不手際で保守層から大バッシングを受け、社長の退陣にまで追い込まれた。政府自民党はテレビ報道にも公然と注文を付け、翌春にかけ各局の看板キャスターが次々降板する異様な光景も見られた。

こうしたなか、文太の死が報じられたのは十二月一日、衆院選公示前日という、まさに、デリケート極まらないタイミングだった(死去は十一月二十八日)。文



大河ドラマ『獅子の時代』に出演した1980年当時の菅原文太

字通り息を引き取る直前まで社会批判、政権批判を繰り返した往年のスターの死を、テレビ各局は、腫れ物に触るように、報道した。延々と紹介されたのは「仁義なき戦い」や『トラック野郎』など半世紀前の主演作が中心。社会派としての、もうひとつの顔〆に関しては、申し訳程度に触れるだけだった。

携帯電話さえ所持せずに通じた本人は、ネットで何を言われても意に介さなかったに違いないが、訃報を受けたネット書き込みには、ファンたちの痛切な追悼コメントがあふれるなか、「政治運動にかぶれ、晩節を汚した」などと批判する声も見られた。

その死に先立つこと十八日、同じ十一月の前半には、やはり東映出身の人気スター・高倉健が他界した。『昭和の男らしさ』を体現した二大スターの相次ぐ死。よりカリスマ性のあつた高倉が、一生涯、俳優業ひと筋〆を貫いた人だっただけに、文太は余計、その〆転身〆を非難された面もあったように思える。

ただ、俳優全盛期も晩年も、「文太の本質は一貫して変わらない」と主張する友人もいる。東大名誉教授の憲法学者・樋口陽一である。

東北の名門・宮城県立仙台一高で文太の一級下だつ

みやま・たかし●1961年神奈川県生まれ。著書に『国権と島と涙〜沖縄の抗う民意を探る』(朝日新聞出版)、『還流する魂 (マブイ) 世界のウチナーンチュ120年の物語』(岩波書店)など。